
キミに続く

深山 奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミに続く

【Nコード】

N9387X

【作者名】

深山 奏

【あらすじ】

現代 / 幼馴染 / 高校生 / 切ない / 全年齢OK / ほのぼの / BL ぎみ /

ある日、幼馴染から「自分は養子」だと打ち明けられ、二人で生みの親の家を訪ねる話です。

HPにてUPしています。

ありゃあ、もしかしてあんた雪博かあ？」

「え！？ あっ……………そう、です」

上手く誤魔化すことができずに雪博は簡単に認めてしまう。

「あああ、そうか、そうか。よう来たなあ。若い人が喜ぶようなもんはなあんもないけど、遠慮せんと上がってけ」

おばあさんはガラガラと引き戸を開けて家に入っていく。

鍵、かけてないんだ…………。

「上げれ、上げれ」

おばあさんが顔全体で笑う。

僕たちは顔を見合わせた後、

「まあ、ここまで来たんだし…………」

「雪博がいいなら、僕は…………」

「お邪魔します」

「僕も、お邪魔、します」

玄関で靴を脱いだ。

結果から言うと、雪博の両親はすでに亡くなっていて、今は父方の母親、つまりさっきのおばあさんが一人でこの家に住んでいた。

僕たちはぎこちない仕草で仏壇に線香をあげて、手を合わせて、おばあさんの作ってくれたかりんとうを食べた。

おばあさんは、たくさん作ったからと、赤の他人の僕にまでかりんとうを手土産にくれて、僕たちを駅まで送ってくれた。

僕たちは道も分かるし、二人で帰ると言ったけど、せっかく来てくれたのだからもっと話がしたいと、おばあさんは駅までついてきた。

おばあさんの速度に合わせてゆっくり道を歩いているとき、雪博が雪博の父親の若い頃にそっくりだという話を聞いた。おばあさんは一瞬息子が帰ってきたのかと思ったそうだ。

「ありがとうございます」

「お礼をいうのはこっちのほうだ。またいつでもおいでえ」

おばあさんは目を潤ませて雪博の手を握った。それから僕にも同じようにして、

「これからも雪博と仲良くしてやってね。遠慮せんといつでも来てねえ」

と何度も頭を下げてくれた。

一時間に一本しか来ない電車がやってきて、僕たちは電車に乗りこむ。今度の車両は両サイドに長い椅子が備えつけられている、見慣れた車両だ。

電車が動き出して、おばあさんが淋しそうな顔で手を振る。

僕たちは行儀の悪い子供みたいに座席に膝立ちになって、ガラス越しに何度も手を振った。

おばあさんの姿はすぐに見えなくなっただけど、おばあさんはまだ僕たちに手を振っているような気がして、雪博も僕もしばらく 駅のほうを見つめていた。

雪博が膝立ちをやめて、椅子に座り直す。いつもは少し窮屈そうに折り曲げている長い脚も今はゆったり通路に投げ出して。

僕も座り直して、標準サイズの足を投げ出す。人がいないとゆったり座れて楽だ。

「いい人そうじゃん」

「……………だな」

それっきり僕たちは黙ったまま来たときと同じ景色を見ていた。でも茜色に染まった田園風景は来たときとはぜんぜん違う風景に見えた。

緊張してた雪博も今は体からすっかり力が抜けて、意識をどこかに忘れてきたみたいにぼんやり外を眺めている。本当の親が死んでいることを知って悲しんでいるようでも、おばあさんに会えたことを喜んでいられるようでも、これからのことに頭を悩ませているようでもなかった。

雪博は空気になつたみたいだった。

「なに、考えてる？」

車窓の外に視線をやつたまま声をかける。

「なにも」

答えた後で、雪博はしばらく考えて、

「なんか上手く説明できない」

落ち着いた声で言った。自分の生まれた町の空気に自分を溶けこませるみたいに、町の空気を全身に覚えこませるみたいに。

「そうなんだ」

僕が言うと、雪博は幼稚園児みたいに小さくこくんと頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9387x/>

キミに続く

2011年10月26日05時13分発行